

ジェイン・オースティンの小説にみられる 「顔を赤らめる」女性たち

真下 美和

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の作品には、何らかの制約があって、自分の気持ちを自由に言葉で表現することが難しい立場や状況にある人物が登場する。そこで、感情の「結果」として表れる“blush”という身体反応を、そのような人物の気持ちを表現する手段として、オースティンがどのように用いているのかを考察する。

この“blush”の「原因」となる感情を考える際、オースティンの時代に全盛を誇り、「一般社会に人気があったという点で、小説と張り合っていた」(Bradbrook 110) “conduct book”の中で、“blush”がどのように扱われていたかにまず注目することにする。

1. 当時のコンベンション

— “conduct book”における“blush”の定義 —

1) “conduct book”とは？

“conduct book”は、新興中産階級の若い女性に向けて書かれた「道徳や社会に関する助言の宝庫 (repositories of moral and social advice)」(Byrne 297)であった。プーヴィー (Poovey) によれば、“conduct book”が出版されるようになった背景に、「ピューリタン主義や、さらに福音主義が優勢になり (the ascendancy of Puritan and then Evangelical principles)」(7)、「中産階級が台頭してきて (the rise of prominence of the middle classes)」(7)、女性の役割の定義が複雑になったことがある。新興中産階級は、勢力を拡大させていくに当たって、女性が役立つことを期待した。女性は、経済面においては、労働する男性のために、家庭を居心地のよいものにすることを、また、着飾ることで男性の経済力の鏡としての機能を果たすことを期待され、政治面においては、土地を得て名を残すという彼らの究極の目的のために、地主一族と結びつく結婚を期待された。(7-9)

そのために、彼らは、新興中産階級の価値観に基づき、「『ふさわしい』とみなされるふるまい (the

behavior considered ‘proper’)」(15)を「当然なもの (natural)」(15)であると女性に思わせたかった。彼らは、自分たちのモットーである『『礼儀正しさ』— 慈悲心や慎み深さや自省や誠実さを重要視する行動規範 (‘Politeness’, a code of behaviour that emphasised benevolence, modesty, self-examination and integrity)」(Byrne 298)を「しつけと教育 (nurture and education)」(298)によって実現できると考えていたので、生来のものであるはずの「女性らしさ」にも、修練を積む必要があると考えたのだった。“conduct book”は、新興中産階級にとって、彼らの発展に貢献するために、「母や娘たちにとって規範的な役割 (a prescriptive function for mothers and daughters)」(Poovey 16)を果たしたのだった。

2) 十代のオースティンと *A Father's Legacy to His Daughters*

アウアーバッハ (Auerbach) が、「オースティンはフォーダイスだけでなく、グレゴリー博士の *A Father's Legacy to His Daughters* も読んだ (Austen read not only Fordyce ... but also Dr. Gregory's *A Father's Legacy to His Daughters* ...)」(172)と指摘しているその本は、医者であるグレゴリー博士が自分の娘たちに向けて書いた、当時広く読まれた“conduct book”である。博士は、「当時の女性のマナーの生意気さや無遠慮さ (the forwardness and freedom of contemporary female manners)」を嘆き、「慎み深さや細やかな心遣いや優雅さは、男性の尊敬や賞賛を確実にするだろう (modesty, delicacy, and elegance would better secure men's respect and admiration)」(ODNB 677)と助言した。具体的には、女性にとって「名誉であり幸せ (honour and happiness)」(Dr. Gregory 8)である結婚に結びつくような、「男性から見て、女性が最も立派で愛想がよいと映るような美徳や教養 (those virtues and accomplishments which render you [women] most respectable and most amiable in the eyes

of my own sex.)」(8)について述べている。

そこでは、女性は男性よりも劣った存在ではないというスタンスをとってはいるが、女性は、「男性の気持ちを穏やかにし、男性のマナーを上品にするために (to soften our hearts and polish our manners)」(6) 存在するものとして位置づけられている。博士は、次のような助言もしている。

Be even cautious in displaying your good sense. It will be thought you assume a superiority over the rest of the company. —But if you happen to have any learning, keep it a profound secret, especially from the men, who generally look with a jealous and malignant eye on a woman of great parts, and a cultivated understanding. (31-32)

女性が男性よりも「優れた存在 (a superiority)」である場合は、男性よりも劣った振りをした方が女性自身のためになると助言している。博士は、「真の知性や公平さを備えた男性 (A man of real genius and candour)」(32) は少ないので、女性が優秀だと大多数の男性のプライドが傷つくから、女性に「偽装」を勧めているのである。女性を立てる言い方はしていても結局、女性は男性よりも優秀であってはいけないということになる。

博士のこの助言に対して、「たまたまなんらかの知識を備えている」と言われる、女性たちはどのような反応をしたのだろうか。メアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) は、『女性の権利と擁護』(A Vindication of the Rights of Woman) (1792) で、女性が本来の優秀さを男性には「隠すこと」を博士は勧められている。つまり、「グレゴリー博士は実際には偽装を勧めているのだ (...he actually recommends dissimulation, ...)」(28) と声を大にして批判した。

33歳のウルストンクラフトが正面から批判したこの博士の助言を、十代のオースティンは嘲笑の的とした。『女性の権利と擁護』が出版された同じ年に書いた「レズリー城」(“Lesley Castle”) (1792) で、性格の悪さを隠してお金持ちの青年と結婚することに成功する若い女性を描いているのである。父親の教えどおり、ルーザー (Louisa) は、「不屈の努力」と「勤勉さ」によって「純真」で「優しい」仮面をかぶることに成功し、「気難しく」て「ずるがしこい」生まれながらの性格を完璧に「偽装」する。お金持ちの青年レズリー (Lesley) は、たちまち彼女に夢中になり、彼女と出会って一ヶ月もたたないうちに結婚する。ルーザーは、

子どもの誕生によってレズリーの愛情が揺るぎないものになったと確信すると、自ら仮面を脱ぎ始め、若い青年と駆け落ちする¹。また、例えば『ノーサンガー・アビー』(Northanger Abbey) では、「美少女における生まれながらの愚鈍さの利点」が語られており、オースティンは、「女性は本来の優秀さを男性には隠すべきだ」という博士の意見を明らかに揶揄している²。

3) A Father's Legacy to His Daughters にみられる “blush”

オースティンが、15歳の時に書いた「愛と友情」(“Love and Freindship”) は、感傷小説をからかったものとして有名で、“sensibility”を過剰に崇めるがゆえに、道徳的判断も自分の感情に基づくものであるべきだと信じ込む、登場人物たちの自己中心的な性質を浮き彫りにしている。また、“sensibility”という言葉が暗示する「デリケートな性質」が誇張されており、自称 “sensibility” の人であるローラ (Laura) とソフィア (Sophia) はたびたび失神し、ソフィアは、失神が原因で死に至る。過度な “sensibility” は、オースティンにとってからかいの対象の一つだった。

一方、グレゴリー博士は、“sensibility”を女性の魅力であると考え、次のように述べている。

One of the chief beauties in a female character is that modest reserve, that retiring delicacy, which avoids the public eye, and is disconcerted even at the gaze of admiration. ...

When a girl ceases to blush, she has lost the most powerful charm of beauty. That extreme sensibility which it indicates, may be a weakness and incumbrance in our sex, as I have too often felt; but in yours it is peculiarly engaging. Pedants, who think themselves philosophers, ask why a woman should blush when she is conscious of no crime. It is a sufficient answer, that Nature has made you to blush when you are guilty of no fault, and has forced us to love you because you do so. —Blushing is so far from being necessarily an attendant on guilt, that it is the usual companion of innocence. (Dr. Gregory 26-28) (下線筆者)

この引用では、博士が女性の美点と考えるものが挙げられている。まず、博士は、「人の視線を避けたり、賞賛の眼差しにさえも狼狽するような控え目な態度」を挙げる。そして、女性の美点の中でも最も有力な魅

力として、“blush”という身体反応を挙げ、若い女性が“blush”しなくなると、最大の魅力を失うと注意する。

“blush”は、*OED*では、3番目の意味として、“To become red in the face, (usually) from shame or modesty: to ‘colour up’”と定義されている。つまり、“blush”は“modesty”や“shame”が原因となる身体反応で、“modesty”や“shame”の象徴と言えるだろう。若い女性が“blush”しなくなるということは、言い換えれば、その女性には、女性の美点の中でも最も有力な魅力とされる“modesty”や“shame”が欠けるということの意味するのである。

<“blush”と“sensitivity”, “blush”と“innocence”>

また、博士は、“blush”は“extreme sensitivity”のしるしであり、男性に“extreme sensitivity”がある場合は、欠点になる可能性があるが、女性の場合は特に魅力的になると断言している。博士は、“Nature”, “naturally”, “natural”, といった言葉を使うことで、“modesty”や“extreme sensitivity”や“innocence”が女性に生まれながらに備わる魅力であると、読者である女性を納得させようとする。つまり、“modesty”や“extreme sensitivity”や“innocence”の象徴とされる“blush”を顔に浮かべない女性は、男性から相手にされることもなく、結婚市場から締め出されるということになる。結婚するしか生きるすべのなかった当時の紳士階級の女性たちにとっては、博士の助言は、脅迫的に聞こえたかもしれない。

これは博士独自の考え方ではなく、女性教育について書かれた書物に共通するものだった。その傾向について、イエゼール (Yeazell) は、次のように述べている。

... even as the conventional advice literature tended to reduce all possible directions for a good woman's life to a single plot of courtship and marriage, so it sought to imagine all possible suffusions in her face as forms of blushing, and all blushes, even, as testifying to her modesty and “innocence.” (67) (下線筆者)

女性の顔に浮かぶ赤みは、すべて“blush”と表現され、“blush”が表すものは“modesty”や“innocence”の証しのみ、と想像するように求められたのだった。このような傾向によって、顔を赤らめる女性には、女性が生まれながらに持つ魅力とされる“modesty”や“innocence”が備わっているはずだという偏った見方が生まれることになる。

4) 遊び人ヘンリー・クロフォードの理想の女性

『マンズフィールド・パーク』(*Mansfield Park*)のヘンリー・クロフォード (Henry Crawford) は、まさにそのような偏った見方をする人物である。“Henry Crawford had too much sense not to feel the worth of good principles in a wife, ...” (201) と作者に皮肉を述べられる身勝手な思慮分別の持ち主である。それは、数々の女性との恋の駆け引きを楽しむ享樂的な生活を送ってきた彼の経験によって身についたものだろう。クロフォードは、恋人に望む身体反応の一つとして“blush”を挙げ、次のように語る。

“... I only want her [Fanny] to look kindly on me, to give me smiles as well as blushes, to keep a chair for me by herself wherever we are, and be all animation when I take it and talk to her; to think as I think, be interested in all my possessions and pleasures ...” (158) (下線筆者)

彼は、理想の恋人像として、彼と同じように考え、彼の全てに興味を寄せてくれるような女性を思い描く。数々の女性との恋の戯れを経験してきたヘンリー・クロフォードは女性に、“modesty”や“innocence”を望んでいるのである。

5) 策略家オーガスタ・ホーキンス

男性が“blush”を“modesty”や“innocence”の表れとして見るならば、女性の立場に立てば、女性は、結婚したいと思う男性の気を引くためには、顔を赤らめさえすれば成功する率が高まるということになるだろう。だから、ヘンリー・クロフォードのように、“modesty”や“innocence”を期待して、顔を赤らめる女性に惹かれる男性に対して、次のような警告が出されるのも当然のことだった。

Early in the century [the eighteenth century] the *Spectator* had ... argued quite explicitly that a woman's blushes were not a very reliable guide to her virtue, since she might well keep her sense of shame long after she had parted with her innocence. (Yeazell 67)

洞察力のあるオースティンが、“blush”に関する男性側と女性側の思惑が異なるという興味深い点を見逃すはずがない。実際、オースティンは、『エマ』(*Emma*)の中で、短期間で結婚にこぎつけることができた顔を赤らめる女性を描いている。

オースティンは、4週間という短期間に、エルトン氏 (Mr. Elton) が「彼の虚栄心と思慮分別の両方を

満足させる」(154)までの過程、つまり彼が、オーガスタ・ホーキンス嬢 (Miss Augusta Hawkins) の愛情とお金を自分のものにした過程を、次のように描いている。

The charming Augusta Hawkins, in addition to all the usual advantages of perfect beauty and merit, was in possession of an independent fortune, of so many thousands as would always be called ten; a point of some dignity, as well as some convenience: ... he had not thrown himself away—he had gained a woman of 10,000*l.* or thereabouts; and he had gained her with such delightful rapidity—the first hour of introduction had been so very soon followed by distinguishing notice; the history which he [Mr. Elton] had to give Mrs. Cole of the rise and progress of the affair was so glorious—the steps so quick, from the accidental rencontre, to the dinner at Mr. Green's, and the party at Mrs. Brown's—smiles and blushes rising in importanceⁱⁱⁱ—with consciousness and agitation richly scattered—the lady had been so easily impressed—so sweetly disposed—had in short, to use a most intelligible phrase, been so very ready to have him, that vanity and prudence were equally contented. (154) (下線筆者)

オーガスタ・ホーキンスの魅力は、「完ぺきな美貌と美点というおきまりの長所」と、1万ポンドの財産である。「美貌と美点」が「完ぺき」であることはありえないし、また美点は何を意味しているのかもよく分からない。要するに、彼女の魅力とは、しばしば中身を伴わずによく言われる類のものである。作者オースティンは、このような世間のうわさはあてにはならないと、からかっている。したがって、オーガスタ・ホーキンスの魅力とされるものの中で実質が伴うものは、1万ポンドの持参金だけということになる。この1万ポンドは、社会的地位の上昇を狙う、一介の牧師であるエルトン氏にとっては、最高の魅力となった。一方、オーガスタ・ホーキンスは、父親がブリストルの商人^{iv}だったということや、彼女の名字がエリザベス朝の奴隷商人の名前を思い起こさせる^vという設定によって、彼女の父親の商売が奴隷売買と関連していると推測できる。つまり、社会的地位の低い彼女にとって、エルトン氏がたとえ名もない一家の出身だとしても、ジェントリー階級の男性が就く職業として考えられて

いる、牧師職に就いていた彼は、願ってもない結婚相手だった。

引用の最後の行で、エルトン氏の「虚栄心と思慮分別は等しく満足させられた」と書かれている。その原因の一つは、女性であるオーガスタ・ホーキンスの方が、積極的に愛情を表明したからだと考えられる。女性から男性への励ましとなるその様子を、オースティンは「女性に重要となるのはほほ笑みや“blush”で、絶え間なく相手を意識し、心の動揺を示す」とからかい気味に述べている。しかし、“blush”は、無意識の身体反応なので、意図してできるというわけではない。つまり、オースティンは“blush”が重要になってきたと述べることによって、“blush”の象徴である“modesty”や“innocence”が、オーガスタ・ホーキンスには欠けているということを示しているのである。実際、紹介されて1時間後には彼に特別な関心を持ち、4週間という短期間でその男性を確実に物にするために、あれこれと策略をめぐらすわけであるから、“modesty”や“innocence”といった性質を持ち合わせているはずがない。オースティンは、“blush”に関する当時のコンベンションを揶揄しているのである。この“blush”に関するパーレスクは、オースティンが1787年から1793年の間に書いた *Juvenilia* に非常に多く見られ、登場人物の滑稽さを際立たせている^{vi}。

2. 言葉で表すことが難しい立場にある人物の気持ちを表現する “blush”

1) ファニー・プライスの場合

『マンスフィールド・パーク』のファニー・プライス (Fanny Price) の場合、“blush”のコンベンションが彼女の窮地を救うことになる。

ファニーは、実家が子だくさんのうえに裕福ではなかったのに、准男爵である伯父サー・トマス (Sir Thomas) の好意によってバートラム家 (the Bertrams) で養われている。彼女は、その立場上、肩身が狭い思いで暮らしており、養ってもらっているという感謝の心を常に忘れず、皆の役にたとうと振る舞う謙虚な人物である。ファニーは、バートラム家では目立たない存在で、エドモンド以外の人物からは軽んじられていたのだが、徐々に真価を発揮し、注目されるようになる。

その一つに、財産家で遊び人のヘンリー・クロフォードが、男性が妻に望む “modesty” や “innocence” とした資質がファニーにあることを見抜き、彼女に求

婚するというできごとが起こる。しかし、ファニーは、クロフォードが彼女のいとこ達と戯れに恋をするのを何度も目撃していたので、彼が誠実であるとは思えず、彼のことを嫌っていた。ファニーには彼との結婚は無理な話であるが、彼女以外の人から見ると、財産や地位といった点から願ってもない良い縁組だった。サー・トマスは、クロフォードの社会的地位や財産といった面からしか見ていないので、ファニーが求婚を断るつもりだと知って、驚き、次のように言う。

Sir Thomas looked at her with deeper surprise. "This is beyond me," said he. "This requires explanation. Young as you are, and having seen scarcely any one, it is hardly possible that your affections—"

He paused and eyed her fixedly. He saw her lips formed into a *no*, though the sound was inarticulate, but her face was like scarlet^m. (214) (下線筆者)

ファニーがクロフォードの好意を頑なに拒むので、サー・トマスは、ファニーが自分の息子たちに恋をするのではという危惧が、現実になったのではないかと疑う。実際、サー・トマスの推測どおり、ファニーは彼の次男エドモンド (Edmund) を愛していた。この頃のファニーは、パートラム家にはなくてはならない存在になってきていたが、真実を答えて恩を仇で返すようなことは絶対したくなかった。その上、「ファニーは真実を告白するぐらいなら死んだ方がましだった (She [Fanny] would rather die than own the truth,...)」(215) と述べられているように、真実を言いたくないという彼女の意志は非常に固い。ファニーは、常日ごろサー・トマスに対して畏怖の念を抱いており、さらに、質問に答える間、彼にじっと見つめられていたので、声に出して答えることができないほどろたえる。しかし、サー・トマスは、彼女の答えを耳では聞けなかったが、口の動きと顔が真っ赤になったことから、ファニーが「好きな人はいない」と答えたと解釈する。「顔が真っ赤になるということは、非常に慎重な女の子の場合、やましいところがないという証拠かもしれない (That [her face being like scarlet.] ... in so modest a girl might be very compatible with innocence; ...)」(214-15) とオースティンが語るように、サー・トマスはファニーの声にはならなかった「いない」という言葉よりも、彼女の身体に表われた無意識の反応、つまり“scarlet”を見ることで、嘘をついていないのだと確信したのだ。

一方、ファニーは、エドモンドへの愛を隠していたので、サー・トマスに凶星に近いことを言われ、顔を真っ赤にしたと思われる。嘘をつかれた側のサー・トマスは、嘘をついたファニーを、彼女の顔が真っ赤になったことによって、“innocence”であると誤解する。このことは、先に引用したグレゴリー博士の「生来、女性は後ろめたいことが何もない時に顔を赤らめる」、という意見に対するアイロニーであり、オースティンが、“blush”に関する当時のコンベンションに疑問を投げかけているのは明らかである。

2) ジェイン・フェアファックスの場合

『エマ』のジェイン・フェアファックス (Jane Fairfax) もまた、気持ちを言葉で表すことが難しい立場にある。ジェインは、歩兵連隊の中尉だった父親を戦争で亡くし、3歳の時に母親も亡くす。両親の死後は、ハイベリーに住む祖母ベイツ夫人 (Mrs. Bates) と伯母ミス・ベイツ (Miss Bates) によって育てられ、「限られたわずかな財産 (very limited means)」(140) が許すだけの教育しか受けられない運命だった。しかし、9歳になる前に、フェアファックス中尉 (Lieut Fairfax) に命を救ってもらった恩を返したかったキャンベル大佐 (Colonel Campbell) に引き取られ、大佐の家族とロンドンで大半を過ごすことになる。大佐は、ジェインには財産がほとんどないので、「体裁のよい最低限の生活のかたを得る手段 (the means of respectable subsistence)」(141) と当時考えられていたガヴァネスⁿで自活できるだけの教養を身につけるように彼女を育てる。ジェイン自身、結婚する機会がなければガヴァネスとして生きていくしかないことを十分認識していた。彼女は、女性のたしなみと考えられていた教養を身につけ、誰もが認める「真の教養ある若い女性 (the really accomplished young woman)」(142) に成長する。彼女には、結婚と、奴隷同然の扱いを受けるガヴァネスの、二つしか選択肢はない。

このような状況の中、ジェインは、莫大な財産があるチャーチル家 (the Churchills) の後継者フランク・チャーチル (Frank Churchill) と秘密の婚約をする。婚約を強引に秘密にしたのは、自分中心で思慮も足りないフランクの方であったに違いない。というのも、フランクは、ジェインが一介の軍人の娘で、社会的地位は低く、財産は無いに等しかったので、「成り上がり者 (an upstart)」(250) であるフランクの養母チャーチル夫人 (Mrs. Churchill) が二人の結婚に反対することを恐れ、しかもこの一件によって、夫人が機嫌を

損ねて後継者としての地位を剥奪されることを避けたかったからと思われる。ジェインは、事を慎重に進めざるをえない立場にある。

<ジェインの“sensibility”>

ナイトリー氏は『『ジェイン・フェアファックスには感情がある……彼女の感受性は強いと思います。彼女の気質は、慎み、忍耐、自制の点で優れている。 (“Jane Fairfax has feeling ... Her sensibilities, I suspect, are strong—and her temper excellent in its power of forbearance, patience, self-controul; ...”)』』(E 233-34)と述べている。ジェインは、感情を自制できる能力を最大限に発揮し、フランクとの約束のためにハイペリーの人たちを欺いてまで本来の感情を隠す。ジェインの態度は、「非常によそよそしく、不自然 (So cold and artificial!)」(362)だった。しかし、グレゴリー博士が“blush”は“sensibility”の表れだと述べているように、ジェインの感情は“blush”となって表れる。

<愛情の表れとしての“blush”>

ジェインとフランクの婚約は、物語も終わりに近づいて明かされる。その糸口をつかむのは、エマのためにフランクの振る舞いを観察するナイトリー氏である。ナイトリー氏は、ジェインとフランクの間には「ちょっとした秘密の好意や秘密の申し合わせ (a something of private liking, of private understanding)」(275)があるのではないかと疑っていた。そして、二人の間で、「みんなに対して示そうとしているとは思えないような意味ありげな目つき (certain expressive looks, which I [Mr. Knightley] did not believe meant to be public)」(281)が交わされていることに気づき、じつくりと観察していく。

フランクは、ジェインの手紙で、ペリー氏に馬車を使う計画があることを知るのだが、その話はジェインを含むごくわずかな人たちしか知らないことだと知らずに、不注意にも皆の前で話題にしてしまう。フランクは、ジェインとの関係がばれるのを防ぐために、苦し紛れにそれは夢を見たのだとごまかす。ナイトリー氏は、フランクが狼狽を隠すために笑い飛ばし、そしてジェインも誰とも目を合わさないうで済むようなしぐさをするのを見逃さなかった。

次に、ナイトリー氏は、フランクが、「恋の言葉やかけひき的手段 (the vehicle for gallantry and trick)」(279)として、言葉あてゲームを利用するのに気づく。フランクは、大胆にも皆のいる前で、ペリー氏の件でのへまを示す、“blunder”というメッセージを彼女に伝える。ナイトリー氏は、ジェインがそのカードをち

らっと見て、「かすかにほほ笑んで (a faint smile)」(278)、カードを押しやるのに気づく。ジェインは、押しやりはするのだが、他のカードに混ぜて隠そうとせず、向かいに座っているフランクに目を向ける。うかつにも、慎重なはずのジェインも、“blunder”を犯してしまうのである。

カードが放置されたままだったので、答えが解ったハリエット (Harriet) が“blunder”と声に出して読む。「その言葉は blunder だった。ハリエットがそれを勝ち誇って言うと、ジェインの頬が赤くなった。そのために、その言葉に特別な意味を与えた。(The word was blunder; and as Harriet exultingly proclaimed it, there was a blush on Jane’s cheek which gave it a meaning not otherwise ostensible.)」(279)ジェインの“blush”は、「告白の身体反応 (a somatic act of confession)」(O’Farrell 5)として機能し、ナイトリー氏は、この“blunder”という言葉に込められた二人の親密さに気づくのである。ナイトリー氏が、「お気に入りのジェインの慎み深さや慎重さがこれほど眠ってしまうことがありうるのか! (How the delicacy, the discretion of his favourite could have been so lain asleep!)」(279)と嘆くほど、ジェインはフランクを愛しているのだ。

3) ミス・ベイツの場合

ジェインの伯母であるミス・ベイツは、「若くも美しくもなく、お金持ちでもなく、結婚もしていない女性 (a woman neither young, handsome, rich, nor married)」(35)である。彼女は、母親と暮らし、教区牧師だった父親が生きていたころの生活と較べるとずいぶんとおちぶれた生活を送っている。彼女の「この世で最も苦しい境遇 (the very worst predicament in the world)」(35)は、気持ちを自由に表現することを難しくするはずである。

彼女は、ボックス・ヒル (Box Hill) でのピクニックで、姪と同じ年で、小さい頃からかわいがっている、彼女とは全く正反対の境遇のエマに、残酷なことを言われてしまう。「面白い話なら1つ、まあまあ面白い話なら2つ、つまらない話なら3つ、エマに聞かせる」というフランクが提案した余興に、「悪意のない噂話 (harmless gossip)」(35)が大好きなミス・ベイツは、「つまらない話を3つ (Three things very dull indeed.)」(296)なら口を開けばすぐに出てくると言って、その場を盛り上げようと愛想よく一番に名乗りを上げる。しかし、エマは「あら!でも難しいかもしれません。

失礼ですが、数が限られています。一度に3つだけですよ。(“Ah! ma’am, but there may be a difficulty. Pardon me—but you will be limited as to number—only three at once.”) (296) と言う。つまり、彼女のおしゃべりはいつも長くて退屈であるということ、皆の前で言ったのだ。ミス・ベイツは、エマのみせかけの礼儀正しさにだまされて、何を言われたのかすぐには理解できなかったが、意味が分かってからも、腹を立てることはなかった。しかし、彼女の顔には“a slight blush” (296) が浮かぶ。

ミス・ベイツは、自分の言いたいことをのべつ幕なしにしゃべるというイメージが強いが、それは相手の気持ちを考える気配りなしのものではない。その気配りは、時として、相手の望むものと少々ずれ、喜劇的になることもある。しかし、その気配りや、「素朴で快活な性質や満足して感謝に満ちた心 (The simplicity and cheerfulness of her nature, her contented and grateful spirit)」(35) によって、彼女はハイベリーの住人みんなから愛されている。ミス・ベイツは、エマに残酷なことを言われた時も、エマが何の理由もないのに思いやりのないこと言うはずがないと思ひ、自分に悪いところがあったのだと、反省する。おしゃべり好きなミス・ベイツの気持ちが言葉ではなく、“blush” によって表現されるこの場面は、彼女がどれほど傷つき悲しんでいるか、自らを省みてどれほど恥ずかしい思ひをしているかといった、一言では言い表せない複雑な感情を効果的に明示していると言えるだろう。

3. まとめ

その他にも、オースティンは、『説得』(Persuasion) の孤独な女主人公アン・エリオット (Anne Elliot) の「やつれた (haggard)」(5) 顔に浮かぶ “blush” によって、ウェントワース大佐への積年の思ひを表し、また時には、社会的地位のない者に礼儀を欠く態度をとる父や姉に対する恥ずかしさを明示している。

オースティンは、“blush” という身体反応を用いることによって、当時の “blush” に関するコンベンションを揶揄し、疑問を投げかける一方、「意識の真相を忠実に表現」(佐藤 170) するための工夫として用い、言葉で表すことが難しい立場にある人物の心の中を効果的に表していると言える。

注

i Louisa was naturally ill-tempered and Cunning; but she had been taught to disguise her real Disposition, under the appearance of insinuating Sweetness, by a father who but too well knew, that to be married, would be the only chance she would have of not being starved, and who flattered himself that with such an extraordinary share of personal beauty, joined to a gentleness of Manners, and an engaging address, she might stand a good chance of pleasing some young Man who might afford to marry a Girl without a Shilling. Louisa perfectly entered into her father’s schemes and was determined to forward them with all her care and attention. By dint of Perseverance and Application, she had at length so thoroughly disguised her natural disposition under the mask of Innocence, and Softness, as to impose upon every one who had not by a long and constant intimacy with her discovered her real Character.

(Catharine and Other Writings 114) (下線筆者)

ii The advantage of natural folly in a beautiful girl have been already set forth by the capital pen of a sister author; —and to her treatment of the subject I will only add in justice to men, that though to the larger and more trifling part of the sex, imbecility in females is a great enhancement of their personal charms, there is a portion of them too reasonable and too well informed themselves to desire any thing more in woman than ignorance. But Catherine did not know her own advantages—did not know that a good-looking girl, with an affectionate heart and very ignorant mind, cannot fail of attracting a clever young man, unless circumstances are particularly untoward.” (NA 111) (下線筆者)

iii 化粧によって頬を赤くすることは可能であるが，“...rouge was becoming unfashionable in the 1780s...” (The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen Juvenilia 449; note 39) とある。

iv ブリストルは、「貿易で栄えた港町として知られており、そこでは1807年まで奴隷売買も行われていた。」(E 155; note72) オースティンは、エルトン夫人の父親を “a Bristol—merchant, of course, he must be called” (E 155) と表現し、“a Bristol” と “merchant” の間にダッシュを挿入して間を作り、さらに推量の助動詞 “must” を使うことによって、ブリストルのれっきとした商人であるとは断言しない。この場合のダッシュは、書き手の躊躇を意味していると思われ、父親の商売に対して何か不審な点があることを示唆している。

v ダックワース (Duckworth) は，“... She [Austen] may have intended Mrs. Elton’s name—Hawkins—to recall that of the Elizabethan sailor and slave trader, Sir John Hawkins.” (E 242-43; note98) と述べている。

vi 例えば、「フレデリックとエルフリーダ」(“Frederic and Elfrida”) (1787-1790) では、頬紅を使用する女性がからがいの対象になっている。“amiable” であるとされるレベッカ (Rebecca) は “Patches, Powder, Pomatum

and Paint with which she was vainly endeavouring to remedy the natural plainness of her face.” (*Catharine and Other Writings* 6) と描かれる。「レズリー城」(“Lesley Castle”) (1792) では、生来の青白い顔を隠すために大量の頬紅をつけるスーザン・フィッツジェラルド (Susan Fitzgerald) が “... you can witness how often I have protested against wearing Rouge, and how much I always told you I dislike it.” (123) と語ることによって、笑いを誘う。「ジャックとアリス」(“Jack and Alice”) (1787-1790) では、お酒の飲み過ぎによって顔が赤いミス・ジョンソン (Miss Johnson) が、友人のレイディ・ウィリアムズ (Lady Williams) から赤すぎる顔色は欠点となる (16) と何度も言われ、我慢できなくなり、殴りかかろうとするというエピソードがある。

vii 『マンスフィールド・パーク』の中で、ファニーは “the only character said to ‘blush’” (Sutherland and Le Faye 162) である。引用箇所の前場面でも、ファニーは顔を赤らめている。例えば、サー・トマスがクロフォードのことでファニーに話があるので座るようにと言うと、 “Fanny obeyed, with eyes cast down and colour rising.” (MP 212) と描写される。また、クロフォードがファニーへの求婚の許しを求めにやって来たことをサー・トマスから暗に告げられると、 “Fanny’s colour grew deeper and deeper; and her uncle perceiving that she was embarrassed to a degree that made either speaking or looking up quite impossible, turned away his own eyes, ...” (213) と描写される。“colour” は、*OED* の8番目の意味として、 “To turn red in the face, to blush.” とあるので、“colour” も “blush” と同じ意味で使われていると考えてよいだろう。「目を伏せて顔を赤らめる」、 「話をしたり顔をあげることができないぐらいとまどう」、 「見ている人が目を逸らすぐらい顔が赤くなる」ファニーは、グレゴリー博士が女性の美点と説く控え目な態度の持ち主である。だから、ファニーが将来的には飢えをしのぐ唯一の方法 (結婚) を手に入れることができるだろうと、読者は想像できる。

viii 当時、ジェントリー階級の女性に自活の手段として認められた職業は、ガヴァネスぐらいしかなかった。ジェイン自身が、「奴隷売買 (slave trade)」(E 242) を引き合いに出して、 “... There are places in town, offices, where inquiry would soon produce something—Offices for the sale—not quite of human flesh—but of human intellect.” (242) と語っている。彼女の言葉から、女性に認められている唯一のこの職業が、雇い主から非人間的な扱いを受ける仕事であるということが想像でき

る。実際、摂政時代 (1811-20) のあるガヴァネスの日記には、「ガヴァネスの立場は少しでも物を考えたり感じたりする女性には非常に居心地の悪いものです。……雇い主や客たちからは対等に扱われません……。」(川本 10) と記されている。

引証資料

- Auerbach, Emily. *Searching for Jane Austen*. Madison: The University of Wisconsin Press, 2004.
- Austen, Jane. *Catharine and Other Writings*. Ed. Margaret Anne Doody and Douglas Murray. Oxford World’s Classics. New York: Oxford University Press, 1993.
- . *Emma*. Ed. Alistair M. Duckworth. Boston: Bedford / St. Martin’s, 2002.
- . *Mansfield Park*. Ed. Claudia L. Johnson. New York: Norton, 1997.
- . *Northanger Abbey and Persuasion*. Oxford: Oxford University Press, 1988.
- . *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen: Juvenilia*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Bradbrook, Frank W.. *Jane Austen and her predecessors*. London: Cambridge University Press, 1966.
- Byrne, Paula. “Manners.” Todd, Janet. *Jane Austen in Context*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- Gregory, Dr. *A Father’s Legacy to His Daughters*. 1774. 24 Oct 2008 <http://www.rc.umd.edu/editions/contemps/barbauld/poems1773/related_texts/gregory.html>.
- O’Farrell, Mary Ann. *Telling Complexions: The Nineteenth-Century English Novel and the Blush*. Durham and London: Duke University Press, 1997.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer*. Chicago: The University of Chicago Press, 1984.
- Sutherland, John and Deirdre Le Faye. *So You Think You Know Jane Austen?* New York: Oxford University Press, 2005.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. Ed. Carol H. Poston. New York: Norton, 1975.
- Yeazell, Ruth Bernard. *Fiction of Modesty: Women and Courtship in the English Novel*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1991.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- 佐藤信夫『レトリック感覚』講談社, 1992。
- 川本静子『ガヴァネス (女家庭教師) —ヴィクトリア時代の「余った」女たち』中央公論社, 1994。